【研究ノート5】

アングリマーラ（*Aṅgulimāla*）帰信年の推定

森　章司

［1］本稿では世尊が追いかけても追いかけても追いつけないという神通を示されて、凶賊のアングリマーラ（Aṅgulimāla）を帰信させたというエピソードの年代推定を中心とした作業を行う。

なおアングリマーラの教化については、岩井昌悟研究分担者が「モノグラフ」第7号に掲載した【論文7】「『仏説十二遊経』の仏伝伝承――成道後12年間の雨安居地を中心にして――」という論文において、『十二遊経』(1)に「九年、穢沢中為陀崛摩説法」という文章が見いだされ、このなかの「陀崛摩」がアングリマーラを指すものと考えられるので、アングリマーラについての詳しい資料の紹介をしている(2)。ただしこの論文はその場所についての検討を中心としたものであり、本論の主題とは自ずからに異なるところがあるので、この論文を参照しながら、改めて稿を起すこととする。

（1）大正04　p.147

（2）2003年11月発行。pp.144～148

［1-1］アングリマーラ（Aṅgulimāla）は央瞿利摩羅、鴦掘魔羅、鴦掘魔、鴦掘摩、央掘魔（摩）羅、鴦窶利摩羅などと音訳され、鴦崛鬘、鴦掘髻などと音・意訳され、指鬘と意訳される(1)。

（1）央瞿利摩羅は『雑阿含』1077（大正02　p.280下）に、鴦掘魔羅は『別訳雑阿含』016（大正02　p.378中）に、鴦掘魔は『増一阿含』004-008（大正02　p.558中）、『増一阿含』038-006（大正02　p.719中）に、鴦掘摩は竺法護訳『鴦掘摩経』（大正02　p.508中）に、央掘魔羅は求那跋陀羅訳『央掘魔羅経』（大正02　p.512中）、『仏本行経』（大正04　p.082中）に、央掘摩羅は『大唐西域記』（「中国古典文学大系」22　p.184）に、鴦窶利摩羅は『大唐西域記』（同前）に、鴦崛鬘は『僧伽羅刹所集経』（大正04　p.134下）に、鴦掘髻は西晋沙門法炬訳『仏説鴦掘髻経』（大正02　p.510中）に、指鬘は竺法護訳『鴦掘摩経』（大正02　p.508中）、『大唐西域記』（同前）などに使われている。

［1-2］アングリマーラを主人公とする原始仏教聖典（A文献）には次のようなものがある。

MN.086 Aṅgulimāla-s.（鴦掘摩経　vol.Ⅱ p.097）：以下“*MN.*”と略称する。

『雑阿含』1077（大正02　p.280下）：以下『雑阿含』と略称する。

『別訳雑阿含』016（大正02　p.378中）：以下『別訳雑阿含』と略称する。

『増一阿含』038-006（大正02　p.719中）：以下『増一阿含』と略称する。

竺法護訳『鴦掘摩経』（大正02　p.508中）：以下『竺法護』と略称する。

西晋沙門法炬訳『仏説鴦掘髻経』（大正02　p.510中）：以下『法炬』と略称する。

この他に大正新脩大蔵経の「阿含部」には求那跋陀羅訳『央掘魔羅経』(1)が収められているが、これは如来蔵系の大乗経典であるから除外する。

以上のうち、“*MN.*”『増一阿含』『竺法護』『法炬』にはアングリマーラが帰信した後のコーサラ国王波斯匿との問答や難産に苦しむ女性を救ったなどのエピソードも記されるが、『雑阿含』『別訳雑阿含』は帰信して阿羅漢果を得、*Theragāthā* の *vs.871~886* に相当するウダーナを誦した場面しか記されていない (2) 。

また多くの「後期の原始仏教聖典」（B 文献）もあり、さらに「後世の釈迦仏教文献」（C 文献）もあるが、これらは論述の途中でその都度紹介する。

（1）大正 01　p.512 中

（2）p.080　*Theragāthā* のアングリマーラの偈は *vs.866~891* であるが、“*MN.*”に収められている偈はその一部である。

［2］アングリマーラの帰信年は釈尊がどこにおられたか（仏在処）ということが手掛かりとなる。

［2-1］先に紹介したＡ文献の仏在処は下記の通りである。

“*MN.*”：Bhagavā Sāvatthiyaṃ viharati Jetavane Anāthapiṇḍika ārāme

『雑阿含』：仏在央瞿多羅国人間遊行経陀婆闍梨迦林中

『別訳雑阿含』：仏遊化摩竭陀国桃河樹林

『増一阿含』：仏在舎衛国祇樹給孤独園

『竺法護』：仏遊舎衛国祇樹給孤独園

『法炬』：婆伽婆在舎衛城祇樹給孤独園

『雑阿含』の央瞿多羅国はアングッタラーパとも考えられるが、闍梨迦林はパーリのアッタカターがいう‘Kosala-rañño vijite Jālinaṃ nāma vanaṃ’ (1) の‘Jālin vana’に相応するであろうから、コーサラ国中の１国と解釈した方がよいであろう (2) 。

また『別訳雑阿含』の摩竭陀国はマガダ国に相違ないであろうが、他のすべてがコーサラ国とし、また次項で述べるように世尊がアングリマーラを教化した場所もコーサラ国とされるから、これは誤伝承として無視することにする。

（1）*Theragāthā-A.*　vol.Ⅲ　p.54

（2）「モノグラフ」第 15 号に掲載した「原始仏教聖典の仏在処・説処一覧－－その他国篇－－」の【補註 6】p.626 右参照。

［2-2］参考のためにアングリマーラが帰信したシーンを描くＢ文献における仏在処を上げておく。

『賢愚経』「無悩指鬘品」（大正 04　p.423 中）：仏在舎衛国祇樹給孤独園

『出曜経』（大正 04　p.703 上）：仏在舎衛国祇樹給孤独園

このように後期の原始仏教聖典においても、アングリマーラを教化したのは釈尊が舎衛城の祇園精舎に滞在していたときという認識を有していたことになる。

［2-3］以上のように釈尊がアングリマーラを教化したのは舎衛城の祇園精舎に滞在していたときのことであり、われわれは祇園精舎が釈尊の教団に寄進されたのは釈尊の成道 14 年＝釈尊 48 歳の雨安居前であり、この時に初めて釈尊は舎衛城に足を運ばれたと考えているから、アングリマーラ事件はそれ以降のことということになる。

［3］次に釈尊がアングリマーラを教化されたエピソードについて検討する。

［3-1］まずＡ文献を調査する。

“*MN.*”は、「世尊は晨朝に内衣を着け、衣鉢を持して、舎衛城に行乞に入り、乞食が終って食後行乞から帰って、臥坐具を持ち（senāsanaṃ saṃsāmetvā）、衣鉢を持して（pattacīvaraṃ ādāya）アングリマーラのところに行かれた」としている。「モノグラフ」第17号に掲載した【論文23】「原始仏教聖典にみる釈尊と仏弟子たちの一日」に書いたように、釈尊の食後の午後時分は、「昼日住のために（divā-vihārāya）どこそこに行かれた」とされることが多く、この場合は衣鉢を片づけて、いわば手ぶらで昼日住に行くのであるが、今の場合は「臥坐具を持ち、衣鉢を持して」とされるから、これは昼日住を過ごされるためではなく、むしろ遊行に出られたということを示すと理解してよいであろう。この前に「コーサラ国王波斯匿の領土に（rañño Pasenadissa Kosalassa vijite）アングリマーラという凶賊（coro aṅgulimālo nāma hoti）があった」とされ、「彼によって村は非村とされ、町は非町とされ、国は非国とされた（tena gāmā pi agāmā katā, nigamā pi anigamā katā, janapadā pi ajanapadā katā）」とされ、世尊は彼が住んでいるところに通じる道（addhānamagga）を行かれたとするから、アングリマーラが住んでいたところは舎衛城内ではなく、コーサラ国内のどこかであったということになる。釈尊はここに行かれるために「臥坐具を持ち、衣鉢を持って」遊行に出られたのである。

この後にアングリマーラを教化される描写が続くのであるがこれは省略する。彼はこのとき出家を願い、世尊は「比丘よ、来れ（ehi bhikkhu）」と言われ、彼は比丘となった（ahu bhikkhubhāvo）とされている。釈尊は「善来比丘具足戒」でアングリマーラを直接自分が指導するサンガ、すなわち「ブッダを上首とする比丘サンガ」(1) のメンバーとされたわけである。それから世尊はアングリマーラを随従沙門（pacchā-samaṇa）として、舎衛城に遊行され（yena sāvatthi tena cārikaṃ pakkāmi）、祇園精舎に住された。釈尊はアングリマーラを教化されてから、遊行して祇園精舎に帰られたのである。ちなみにアングリマーラが*Theragāthā*に収められているウダーナ（偈）を説いたのはこれに続く事績の後である。

『雑阿含』はすでに紹介したように、「一時仏在央瞿多羅国人間遊行経陀婆闍梨迦林中」とし、牧牛者たちが「世尊が路を行くのを見」て、この道を行ってはならないと忠告したとするから、世尊が遊行中であったということを物語っているわけである。世尊は神力を現して徐行したが、アングリマーラが追いつけないようにして彼を教化し、「比丘よ、よく来た」と告げて出家・具足戒を授け、出家したアングリマーラは専精思惟して阿羅漢果を得て、（*Theragāthā*と同じ）偈を誦した、とされている。

『別訳雑阿含』も、「一時仏遊化摩竭陀国桃河樹林。放牧人の此林中に鴦掘魔羅賊或傷害人有りと称するを見る」とするから、マガダ国ではあるけれどもこれも世尊が遊行中であったことを示している。この後に「汝善来便得成沙門」とされ、彼は阿羅漢果を得て偈を誦した。

以上のように“*MN.*”と『雑阿含』『別訳雑阿含』は、アングリマーラ事件の時には釈尊は祇園精舎におられたが、「遊行」してアングリマーラの処へ行かれたというイメージを有しているとすることができる。次に紹介する『法炬』『竺法護』や『増一阿含』は遊行されたことを明確には示していないが、しかしイメージとしては同様であろうと考えられる。

まず『法炬』は、比丘らが舎衛城に乞食に入ったとき、人々が波斯匿王の宮門の外で、

「この国土に鴦掘髻という大悪賊があり、人民を殺害して指を持って華鬘を作り、安心して暮らせない、どうか国王はこれを降伏してほしい」と泣き叫んでいた。比丘らは食後に世尊のところに行き、これを報告した。「時世尊従比丘聞。即従坐起若鴦崛髻居止処。世尊便往彼所」とするから遊行したことを示す言葉はない。なお「若」は「至る」という意味である。そして釈尊はアングリマーラを教化した後、「従闍梨園詣祇洹」という。これによってアングリマーラを教化した場所は闍梨園であったことがわかる。「この国土に鴦掘髻という大悪賊があり、……」とするのもこれを語るわけである。そして世尊は「善来比丘」で彼に具足戒を与えた。

『竺法護』もアングリマーラが殺人を行ったので、「爾時世尊告諸比丘。汝等且止。吾往救之。仏従坐起尋到其所。道逢芻牧荷負載乗」とするから、遊行して行ったという言葉はない。しかし「道に牧畜をする人の荷物を背負い、車に乗せて運ぶのに逢った」とするから、遊行していったというイメージを持っていたのであろう。そして教化して「垂哀接済得使出家受成就戒。仏則授之即為沙門」とする。ここでは「善来比丘具足戒」のことは意識されていない。

これに対して『増一阿含』は、その時比丘らが舎衛城に乞食に入って、波斯匿王の王宮の外に多くの人が集まって、鴦掘魔という賊が一切衆生を殺し、日取人殺以指為鬘とし、人亡国虚となっているから、「唯願大王。当往共戦」と訴えているのを聞いて、乞食終って祇園精舎に帰り、世尊のところに行ってこのことを訴えた。「爾時世尊聞彼比丘語已。即従座起黙然而行。是時世尊尋到彼所」とするから、ここにも遊行に出たということを表す言葉は見いだされない。しかし薪を拾う人や牧牛者が登場するから、これも遊行に出たというようなシチュエーションをイメージしていると考えてよいであろう。

以上のように、原始仏教聖典には釈尊がアングリマーラのいる処まで遊行して行ったというイメージを持っていたことが判る。後述するように『大唐西域記』や『法顕伝』は、アングリマーラの暴行の現場が舎衛城内であったと考えているようであるが、これは誤った伝承であるということになる。しかし遊行して行ったとしても、何日もかけての遊行というわけでもなさそうであるから、アングリマーラが住んでいたのは、同じコーサラ国内の、舎衛城からはさほど遠くない森の中であったと想像して大過ないであろう。

なおここには阿難は登場しないが、危険なところに行くというシチュエーションがあって、だから釈尊は１人で行かれたというイメージで描かれているからであろう。『増一阿含』は薪を拾う人や牧牛者が「沙門沙門。勿従彼道。40 人 50 人と固まって行っても過ぎることができない」というのに、「然沙門瞿曇独無有侶」とされているし、『竺法護』はアングリマーラは「十人百人見我馳迸不敢当也。吾常奮威縦横自恣。況此沙門独身而至」と考えたとし、『法炬』も 10 人、20 人、あるいは百人、千人が集まってこそ過ぎることができるのに、「然此沙門独来無伴」としている。このようにこれらの経はすべて、アングリマーラの教化は危険であったから、釈尊１人で出かけられたというイメージで書かれている。後でも検討するが、これらアングリマーラを主人公にするＡ文献にはいっさい阿難が登場しないが、それをもってこのエピソードが阿難の侍者になる前のこととは言えないわけである。

またアングリマーラは「善来戒」で釈尊の弟子になったとされている(2)。確かに「善来具足戒」は初転法輪において五比丘が出家受戒した具足戒法であって、「三宝帰依具足戒」

「十衆白四羯磨具足戒」に先立つもっとも早い具足戒法であるが、一方では釈尊入滅の時点でのスバッダも「善来比丘具足戒法」によって最後の直弟子とされたと考えられるように、終生釈尊だけに許された具足戒法であるから、「善来比丘具足戒法」によって比丘となったことが年代の決め手とはならない。

（1）「モノグラフ」第 13 号に掲載した【論文 13】「『仏を上首とするサンガ』と『仏弟子を上首とするサンガ』」参照。

（2）*Theragāthā v.870* にも、世尊はアングリマーラに向かって、「修行者よ、さあ、来なさい（ehi bhikkhu）」と言った。まさにこのことで、彼は修行者たる資格を得た（ahu bhikkhu-bhāvo）、とされている。

［3-2］後期の原始仏教聖典も調査しておく。

*Theragāthā-A.*は、「アングリマーラがコーサラ王の統治する Jālin の森（Kosala-rañño vijite Jālinaṃ nāma vanaṃ）で母を殺そうとしているのを知って、ブッダは 30 由旬（tiṃsa-yojanikaṃ）を行ってアングリマーラを阻止した」(1) とし、*Suttanipāta-A.*は、「ブッダはアングリマーラを化するため、30 由旬を（tiṃsayojanaṃ）一瞬にして（muhuttena）行った」(2) とし、*Jātaka 469*は、「昼食後ただ 1 人 30 由旬の道を行って（eko pacchābhatte tiṃsayojanamaggaṃ gantvā）、アングリマーラを阿羅漢の位に立たしめた」(3) とするから、パーリのアッタカターは祇園精舎とジャーリニーの森は 30 由旬も離れていたと考えているわけである (4) 。由旬には小由旬と大由旬があって、小由旬は約 6.5km、大由旬は約 13km に相当する (5) 。このうちの小由旬の方が「律蔵」の規定に用いられる由旬であるが、これを採用しても 30 由旬は 195km に相当する。われわれは釈尊の遊行は 1 日に 1 由旬と考えているから、30 日もかかるほどの距離であったことになる。コーサラ国はかなりの広さの国土を有していたと考えられるが、それにしてもこれは離れすぎているといわなければならないであろう。もちろんこれは説話であるからこの距離を 1 瞬のうちに移動したのである。『僧伽羅刹所集経』(6) も、釈尊がアングリマーラを教化したのは闍梨園中であって、世尊は彼を「善来比丘」で具足戒を与えたとするから、パーリのアッタカターと同様の伝承を持っていたのかも知れない (7) 。

これに対して *Buddhacarita* は「スフマの人民の間で残忍なバラモンであったアングリマーラを教化された」(8) とし、『仏所行讃』は「央瞿利摩羅　於彼脩侔村　為現神通力　化令即調伏」(9) とする。スフマというのは、梶山雄一、小林信彦、立川武蔵、御牧克己訳の『ブッダチャリタ』の訳註 (10) では、西蔵訳で Phra mo（sūkṣma）であるが、漢訳「脩侔村」からみると、Suhma の誤訳と思われるというように、西蔵訳で Phra mo（sūkṣma）であって、これをスフマと理解したことが知られるが、いずれにしても詳細は不明である (11) 。しかしともかく釈尊がアングリマーラを教化されたのは舎衛城内でないことだけは確かである。

しかし後世の文献であるが、『大唐西域記』(12) は、「室羅伐悉底国には勝軍王の御殿の址と、勝軍王が如来のために建てた大法堂の址と、そこから遠くないところに摩訶波闍波提の精舎の址（その上にストゥーパがあるという）と、その東隣にスダッタの屋敷の跡と、その側に鴦窶利摩羅（指鬘）が邪心を捨てたところにストゥーパが建てられているとする。「邪心を捨てた」というのは、釈尊に帰信したということであろうから、アングリマーラ事

件の現場は舎衛城内であったという伝承を語っているのであろう。『法顕伝』(13) も、舎衛城内に大愛道のもとの精舎があったところ、須達長者の井壁、鴦掘魔の得道し般泥洹し焼身した処があるとする。得道は釈尊の教えに入信したという意味であろうから、法顕もアングリマーラの帰信の場所は舎衛城内であるという伝承に基づいているのである。しかしこの伝承が誤っていることは、これまで紹介した多くの文献のいうところから明らかである。

(1) vol.Ⅲ　p.055
(2) vol.Ⅱ　p.440
(3) vol.Ⅳ　p.180
(4) アングリマーラが殺人を始める因縁については*MN.-A.*（vol.Ⅲ　p.328）に記されている。
(5) 【論文 4】「由旬（*yojana*）の再検証」（「モノグラフ」第 6 号）p.49 以下参照
(6) 大正 04　p.134 下
(7) 『仏本行経』（大正 04　p.082 中）にも記述があるが、その場所などは記されていない。
(8) 21－13
(9) 大正 04　p.040 上
(10) 「原始仏典」第 10 巻　講談社　昭和 60 年 12 月　p.418
(11) 「モノグラフ」第 15 号の【資料集 2-4】「原始仏教聖典の仏在処・説処一覧－－その他国篇－－」の【補註 11】「蘇摩国」（p.646）参照
(12) 『中国古典文学大系』22　p.184 上
(13) 『東洋文庫』194　p.68

［3-3］ところで B 文献の『十二遊経』は釈尊成道 9 年のこととして、「九年、穢沢中為陀崛摩説法」(1) とする。先に紹介した岩井論文は、『歴代三宝紀』は「第九年。在穢沢為阿掘摩説法也」(2) とし、『仏祖歴代通載』の「仏在穢沢為阿掘摩説法」(3) として、『十二遊経』の「陀崛摩」を「阿掘摩」とするから、これを採用するならばこれはアングリマーラのこととなる、としている (4) 。このように理解すれば、アングリマーラの教化は仏成道 9 年のことということになる。なおこれによればアングリマーラの教化の場所は穢沢ということになるが、岩井論文は「ジャーリン林を指すのではないだろうか」という推定している。

また C 文献であるが *Bigandet* (5) は、ブッダが祇園精舎において第 21 回目の雨安居を過ごされた 55 歳の時に阿難を随侍の比丘に任命され、アングリマーラの教化はその直後のこととしている。Malalasekera (6) もアングリマーラは仏成道 20 年（in the twentieth year of his ministry）に帰信し、後に阿羅漢になったとしている。アングリマーラ事件の年代に言及する数少ない資料であるから、これが信頼するに足るものかどうかについては、後に検討したい (7) 。

(1) 大正 04　p.147
(2) 大正 49　p.024 上
(3) 大正 49　p.496 上
(4) p.144
(5) pp.319～322
(6) p.22
(7) ちなみにティク・ナット・ハンの小説『ブッダ－－いにしえの道、白い雲』（池田久代訳　春秋社　2008 年 12 月）でも舎衛城祇園精舎での第 20 回目の雨安居を過ごした次の年の春の終りとしている。p.252

［4］先に注意したように、“*MN.*”『増一阿含』『竺法護』『法炬』はアングリマーラが帰信した後に、コーサラ国王の波斯匿とアングリマーラが問答したことを伝えている。これも年代推定の手掛かりとなりそうであるから、次にこれを検討する。

［4-1］まずＡ文献を調査する。

“*MN.*”は次のようにいう。世尊はアングリマーラを弟子とされ、彼を随従沙門（pacchā-samaṇa）として舎衛城に遊行され、祇園精舎に住された。そのとき波斯匿王の内宮の門前で人々が「アングリマーラを捕えよ」と叫んだ。波斯匿王は500騎を率いて舎衛城を出、世尊のところに行った。世尊は「あなたはマガダ王のセーニヤ・ビンビサーラを攻めるのですか、ヴェーサーリーのリッチャヴィ王を攻めるのですか、あるいは他の敵王を攻めるのですか」と問いかけた。王は「そうではない。凶賊のアングリマーラを捕えるのだ」と答えると、世尊は「もしアングリマーラが出家して、殺生、不与取、妄語を離れ、梵行に従事するのを見たらどうしますか」と尋ね、傍らにいるアングリマーラを指し示した。その比丘がアングリマーラであると信じられずに王は、「あなたの父の姓は、母の姓は？」と尋ねた。彼は「父はガッガ（Gaggo pitā）です、母はマンターニーです（Mantāṇī mātā）」と答えた。王は信じて彼に供養することを約束したが、彼は阿蘭若住者、乞食者、糞掃衣者、三衣者であると断った。そののち王は「我らは多事多忙であるから（bahukiccā mayaṃ bahukaraṇīyā）行きます」と言って去った。

『増一阿含』は、世尊がアングリマーラを教化して、彼は法眼浄を得た。彼を祇園精舎に連れ帰ったとき、「是時王波斯匿集四部之衆。欲往攻伐賊鴦掘魔。是時王便作是念。我今可往至世尊所。以此因縁具白世尊。若世尊有所説者当奉行之」として世尊のところに行った。世尊はアングリマーラが出家したとしたらどうするかと尋ねた。王はアングリマーラが帰依したことを聞き、信じられないので、王は「汝今姓誰」と尋ね、鴦掘魔は「我姓伽伽。母名満足」と答えた。王は信じて彼に生涯供養することを告げてから、「国事猥多欲還城池」と言ったとしている。

『竺法護』は、世尊がアングリマーラを教化して祇園精舎に帰ったとき、波私匿は兵を引き連れて世尊のところに行った。世尊は埃まみれになってどこから来たのですかと尋ねた。王は穢逆を討とうとしているのですと答えた。世尊は彼がこの会中にあると告げるも、王は信用せず、「あなたの姓は何ですか」と尋ねた。アングリマーラは「姓は奇角であり、奇角は父の本性である」と答えた。王は彼に供養を約束し、「我国多事意欲請退」と告げて去った。

『法炬』は、アングリマーラは阿羅漢果を得た。時に波斯匿は世尊のところに行った。世尊はなぜ埃まみれになって来たのですか、と尋ねた。王は殺賊鴦崛髻を討とうとしてるのです、と答えた。世尊はアングリマーラが出家したことを知らせたが、王は信じられなかったのでアングリマーラに身元を尋ねた。彼は「大王。我名伽瞿母名曼多耶尼」と答えた。王は「我有衆多事欲還国」と言って去った。

以上のように、“*MN.*”『増一阿含』『竺法護』『法炬』はよく一致するが、マガダのビンビサーラ王の名前を出すのは“*MN.*”のみである。

Ｂ文献では『出曜経』がこの場面を記しているが、波斯匿王がアングリマーラが出家して世尊のそばにいることを知って驚いたというのみで、原始仏教聖典のようなディテールは記

していない。

［4-2］以上のように釈尊がアングリマーラを教化した直後のシーンに波斯匿王が登場するのであるが、この波斯匿王は「我らは多事多忙であるから（bahukiccā mayaṃ bahukaraṇīyā）行きます」「国事猥多欲還城池」「我国多事意欲請退」「我有衆多事欲還国」と言って帰ったとされる。

ところでわれわれのホームページに掲載している【文書 06】「コーサラ国波斯匿王と仏教－－その仏教帰信年を中心に－－」(1) なる論文において、波斯匿王の主な事績の年代を次のように推定している。

釈尊年齢　成道後年　　事　績

52 歳　18 年ころ　波斯匿王、マッリカー（＝16 歳）を後宮に入れる。

57 歳　23 年ころ　マッリカーが熱心な仏教信者となり、波斯匿王も優婆塞となる（ただし王はまだ熱心な信者ではなかった）。

58 歳　24 年ころ　波斯匿王とマッリカー（＝22 歳）の間に娘のヴァジーリーが生まれる。

72 歳　38 年ころ　波斯匿王、熱心な仏教信者となる。

73 歳　39 年ころ　コーサラの波斯匿王とマガダの阿闍世王との間に戦争が起こる。

74 歳　40 年ころ　雨安居後にマッリカー（＝38 歳）、女児を出産するも、高齢になっていたこともあって命を落す。

74 歳　40 年ころ　雨安居後に波斯匿王、比丘尼サンガのために王園精舎を寄進する。

そしてこの論文では *SN.*の第 3 相応「コーサラ相応」を、「釈尊に師事するようになってからの事績を時系列にそって編集したもの」(2) と考えている。

ところでこの一連の経の最後の第 25 経は、釈尊が訪ねて来た波斯匿王に、「大王よ、王はどこから来たのですか」と尋ね、王が「主権の傲りに酔い、愛欲の貪りに耽り、国家の保全を得、広大なる領土を征服して住するクシャトリヤの灌頂王には諸々の王事があり、私はそれらに多忙なのです」と答えるシーンから始まっている。そこで世尊は王に、「あなたは老死に押しつぶされようとしているのに、法行、正行、善業、功徳業の外に何かするべき事柄があるのですか」と説かれたことになっている。したがってこのアングリマーラを教化したときの波斯匿王の態度は、まさしくこの「コーサラ相応」の最後の経の状況と一致するということができる。

もし「コーサラ相応」が時系列にしたがって編集されているとするならば、第 14 経と第 15 経は波斯匿王とマガダ国王阿闍世の戦争の話であるから、この第 25 経は阿闍世がビンビサーラからマガダの王権を簒奪した後のことということになる。われわれの「略年表」からいえば、この戦争は釈尊 73 歳の時のことである。

また今のこのエピソードにおいては、波斯匿はアングリマーラ討伐に際して釈尊にお伺いを立て、アングリマーラが仏教に帰信したことを知って供養を約束しているのであるから、熱心な仏教信者になって以降のことであるということも推測しうる。これはわれわれの「略年表」からすれば 72 歳（成道 38 年）以降ということになる。

このようにこのアングリマーラ事件の波斯匿王が「我らは多事多忙であるから余事にかまける暇はない」というのが、「コーサラ相応」の第 25 経に相応する時期を表すとすれば、

ここにビンビサーラ王が話題のみとはいえ登場するのは矛盾することになる。

この矛盾はわれわれの「略年表」が間違っているのか、あるいは“*MN.*”の記述に混乱があるのかということになるが、とりあえずは“*MN.*”の記述に混乱があると考えておきたい。その理由はこのエピソードを記す“*MN.*”『増一阿含』『竺法護』『法炬』は細部においてよく一致するが、ビンビサーラ王に言及するのは“*MN.*”のみであり、しかも「あなたはマガダ王のセーニヤ・ビンビサーラを攻めるのですか、ヴェーサーリーのリッチャヴィ王を攻めるのですか、あるいは他の敵王を攻めるのですか」という問いかけは一種の紋切り型の言葉に過ぎず、この場面でのビンビサーラにはリアリティはないと判断されるからである。

このようなことを考え合わせると、推定の域のことであるが、このアングリマーラの事件は釈尊 73 歳頃のことといってよいかもしれない。想像をたくましくすると、「コーサラ相応」において波斯匿王が「国家の保全を得、広大なる領土を征服して住するクシャトリヤの灌頂王には諸々の王事がある」というのは、このようなアングリマーラなどの盗賊が起す騒動も含まれるとすることも可能である。

（1）元は『印度哲学仏教学』第 21 号（北海道印度哲学仏教学会　2006 年 10 月）に掲載したものである。

（2）p.335

［5］以上のようにアングリマーラは釈尊に教化されて弟子となったが、その直後に阿羅漢果を得たとされている。この直後とは時間的にどのくらいのことをいうのであろうか。次にこのことを検討しておきたい。

［5-1］まず原始仏教聖典の記述を紹介する。そのなかでアングリマーラの帰信のシーンしか記さない『雑阿含』は「アングリマーラは出家して、独一静処に専精思惟し、梵行を増修して、現法に阿羅漢を得た」として、そのときテーラガーターに相当する偈を説いたとし、『別訳雑阿含』は「アングリマーラは出家して空静において、心に放逸無く、専精行道、勤修精進して、以て能く専精摂心して正念に無上梵行を修して、現法中に羅漢を成じ解脱楽を得て」、偈を説いたとするから、出家してから阿羅漢を得るまでには一定の時間の経過があったというイメージなのであろう。

これに対して、これ以外のエピソードを説く経はいくらか説相を異にする。『法炬』と『竺法護』は、帰信して直後に阿羅漢果を成じた、ないしは開悟したとする。これに対して『増一阿含』は出家した直後に法眼浄を得たとはするが、そののち阿蘭若行を行じて阿羅漢果を得たとする。そしてしかる後に難産の婦人を救う話と、舎衛城に乞食に出て傷つけられた話が続き、その後で偈を説いたとしている。したがって『増一阿含』は、阿羅漢果を得た時期は上記の『雑阿含』と『別訳雑阿含』は同じように考えているとしてよいであろう。しかし“*MN.*”は上記の教化のシーンの後に、アングリマーラが舎衛城において難産に苦しむ夫人を救う話が続き、その後に不放逸に行じ、熱心に精勤して住し、久しからずして阿羅漢果を得たとする。偈（ウダーナ）はこの後に説かれたとされている。

このように経によって若干の説相の相違があるが、原始仏教聖典の編集者たちは、アングリマーラは釈尊に教化されてから一定の期間修行して、その後阿羅漢果を成じたと考えていたといってよいであろう。この一定の期間がどれほどかが問題であるが、『法炬』は世尊は

アングリマーラを「我声聞中第一比丘有捷疾智。所謂指髻比丘是」と讃められたとするから、その期間は短かったことを物語るのであろう。他の文献も長い期間を勉励刻苦したというイメージではないから、このように理解して差し支えないであろう。

なお以上のすべてのエピソードを通して阿難はまったく登場しないことはすでに注意したところである。

［5-2］次に後期の原始仏教聖典の記述を紹介する。

Jātaka 469 Mahākaṇha-j.（vol.Ⅳ p.180）：昼食後ただ１人 30 由旬の道を行って、粗暴で悪性のアングリマーラを阿羅漢位に立たせられた。

Jātaka 537 Mahāsutasoma-j.（vol.Ⅴ p.456）：アングリマーラが真実行（saccakiriyā）によって難産に苦しむ女を安らかにして、それ以来、行乞で食が得易くなり、独住を修習し（vivekam anubrūhanto）、後に阿羅漢位に達して、80 人の大長老の一人になった。人々がどうしてこのような凶賊を教化しえたのかをいぶかったので、Mahāsatasoma 本生譚を説かれた。

『賢愚経』巻 11　無悩指鬘品（大正 04　p.423 中以下）：世尊は「善来比丘」と具足戒を授け、彼の応ずるところにしたがって法を説かれ、羅漢道を得た鴦仇魔羅を将いて祇陀林に帰られた。

このように『賢愚経』は出家して直ちに阿羅漢を得たとするのであるが、*Jātaka 537*はアングリマーラは具足戒を得てから一定の時間的経過を経て阿羅漢果を得たとする。

またＡ文献には書かれていないことであるが、*Dhammapada-A.*は、「アングリマーラ長老は師のもとで出家して阿羅漢果を得た。その時アングリマーラは独住処に独座して解脱の楽しみを感受して、*Dhammapada* の 172 偈「以前には怠っていた人でも、後におこたり怠けることがないなら、その人は世の中を照らす。雲を離れた月のように」というウダーナ（偈）を誦した。そして誦しながら無余依の涅槃界に般涅槃した（anupādisesāya nibbānadhātuyā parinibbuto）」とし、阿羅漢果に達してすぐに般涅槃したとしている (1)。Ｃ文献である *Bigandet* も「アングリマーラ（Aṅgulimāla：Ougalimala）は出家して沙門果を開き、間もなく涅槃に入った」としている (2)。

(1) vol.Ⅲ　p.169

(2) vol.Ⅰ　p.254、赤沼　p.321

［5-3］以上のようにＡ文献もＢ文献もＣ文献もアングリマーラは出家具足戒を得てほどなく阿羅漢果を得たとする。しかしこれは阿難やチューラパンタカ（Cūḷapanthaka）などを除くと、すべての名のある出家修行者に等しくいわれることであって、いわば定型的表現であるといえるかも知れない。なおＢ文献・Ｃ文献のあるものでは、アングリマーラは阿羅漢果を得た直後に入滅したとする。

［6］以上がアングリマーラに関する主要なエピソードであるが、この他にも若干のエピソードが見いだされるので、これらをまとめて紹介しておく。

［6-1］まずＡ文献の *Vinaya*「大犍度」(1) には、アングリマーラが出家したとき、人々は見て驚き、恐れて道を避け、面を背け、門を閉ざした。そして「沙門釈氏らはどうして名称強盗（dhajabaddha cora）を出家させるのか」と非難した。そこで釈尊は「名称強盗を出

家させてはならない。出家させる者は悪作である」と定められた、とされている。これはアングリマーラが具足戒を受けた直後のことをイメージしているわけである。

（1）vol. I　p.074

［6-2］B 文献の *Dhp.A.* (1) では、狂象もアングリマーラのもとでは従順であったというエピソードを伝える。

（1）vol.Ⅲ　p.185、vol.Ⅳ　p.231

［6-3］なお順序が逆になったが、アングリマーラの出自について述べておこう。まず A 文献である。*Theragāthā v.889* では、「私は以前にはバラモンの生れであり（brahmajacco pure āsiṃ）、父方も母方も高貴の出身であった（udicco ubhato ahuṃ）。しかし今では善逝・法の王・師の子である」とし (1)、『竺法護』は「アングリマーラは舎衛城中有異梵志の上首弟子であったとされ、その夫人の悪巧みにより、百指をもって鬘をつくることになった」としている。またすでに紹介したところであるが、“*MN.*”では「父はガッガ（Gaggo pitā）です、母はマンターニです（Mantāṇī mātā）」と語ったとし、『増一阿含』では「我姓伽伽。母名満足」、『竺法護』は「姓は奇角であり、奇角は父の本性である」、『法炬』は「我名伽瞿母名曼多耶尼」と語ったとしている。

次に B 文献である。*Theragāthā-A. vs.866-891* の註では、「アングリマーラは舎衛城のコーサラ王のプローヒタである Bhaggava という名前のバラモンの子として生まれた。母親の名は Mantānī」とし (2)、『賢愚経』は「波斯匿王の輔相の子」とする (3)。

（1）p.080
（2）vol.Ⅲ　p.54
（3）大正 4　pp.423-427 下

［7］以上をもとにアングリマーラが帰信したことを中心に、いくつかの事績の年代を推定する。

［7-1］まず釈尊が追いつこうとしても追いつけない神通を示してアングリマーラを教化された年代である。この場所はコーサラ国の首都であった舎衛城の近くの森であって、この時釈尊は舎衛城の祇園精舎におられたとされるから、これは舎衛城の祇園精舎が寄進された釈尊 48 歳（成道 14 年）以降のことということになる。

この時釈尊は祇園精舎からその森に遊行されたが、それはアングリマーラの危害を避けるために伴を連れないただ 1 人であった。したがってここに阿難が登場しないのは当然である。なおアングリマーラが釈尊に帰依した後の波斯匿王との対話の場面や、舎衛城の難産に苦しむ夫人を救ったというエピソードや舎衛城の人々から危害が加えられたというエピソードにも阿難が登場しないが、しかしこれらは、もし阿難が侍者であったとすれば阿難が登場しているはずであるというシチュエーションでもないから、これら一連のエピソードに阿難が登場しないからといって、これらは阿難が侍者になる以前のことと考える必要はないであろう。

むしろこの一連のエピソードでは波斯匿王が重要な役割をもって登場する。しかもこの波斯匿王は仏教に深く帰依している様子が伺える。先に紹介した「コーサラ国波斯匿王と仏教――その仏教帰信年を中心に――」に詳しく考察したように、波斯匿王が仏教に深い信仰をもったのはマッリカーの影響であって、しかもマガダ王阿闍世との戦争の直後のことである

ことを考慮すると、**アングリマーラの教化は釈尊73歳＝成道39年の頃**のことであったと考えてよいのではなかろうか。

［7-2］ところですでに紹介したように、*Bigandet*はブッダが祇園精舎において第21回目の雨安居を過ごされた55歳の時に阿難を随侍の比丘に任命されたその直後のこととし、Malalasekeraもアングリマーラは仏成道20年（in the twentieth year of his ministry）に帰信し、後に阿羅漢になったとしていた。岩井研究分担者の【論文5】「原始仏教聖典資料に記された釈尊の雨安居地と後世の雨安居地伝承」に詳しく紹介されているように、後世の雨安居地伝承では釈尊が舎衛城の祇園精舎に雨安居されたのは成道14年を除くと、第2回目は成道21年目となっており、しかもこの年から入滅の前年を除く釈尊の23回の雨安居地のすべては、祇園精舎ないしは東園鹿子母講堂となっている。これは不自然きわまりない伝承で、信じるに値しないことは「モノグラフ」第14号に掲載した【論文17】「釈尊雨安居地伝承の検証」と、【論文18】「釈尊雨安居地伝承の総括的評価」に書いたとおりであるが、上記のようにアングリマーラはコーサラ国の舎衛城に因縁が深く、といっても第1回目の雨安居では祇園精舎が寄進され、この時に釈尊は初めて舎衛城を訪れられたのであるから、さすがにこの年とはするわけにはいかず、そこで第2回目の舎衛城での雨安居、これから23回も続く舎衛城の雨安居の最初にこれをもってきたと考えるしかないであろう。いずれにしても雨安居地伝承ともども信頼に足るものだとは考えられない。

なお*Vinaya*「大犍度」では、アングリマーラの出家を契機として名称強盗を出家させてはならないと定められたとされている。これはアングリマーラが具足戒を受けた直後のことをイメージしているのであるが、「モノグラフ」第18号に掲載した【論文25】「サンガと『律蔵』諸規定の形成過程」の第6章「受具足戒資格審査項目（遮・難）の制定」に書いたように、犯罪者に具足戒を授けてはならないなどという規定は、サンガが形成された釈尊45歳＝成道12年からほど遠くない時期に制定されたはずであって、アングリマーラが契機となったということはありえない。これはアングリマーラという有名な凶賊が連想され、後に編入されたにすぎないであろう。

［7-3］アングリマーラはこの出家受戒から間もなくして阿羅漢果を得たようである。そして*Dhammapada-A.*や*Bigandet*においてはそれから程なくして入滅したとされている。すでに指摘したように、出家受戒の後間もなく阿羅漢果を成じるというのは、いわば常套句であって、したがってこれを鵜呑みにすることは危険である。しかしアングリマーラに係わる事績は今までに紹介してきたものがすべてであって、この他にはないから、帰信以降の釈尊教団のなかでの存在感がまったく感じられないことを考えると、後期の仏教聖典がいうようにその後間もなくして入滅したのかも知れない。とするならば阿羅漢果を得たのも、出家受戒の後、そう時間は経過していないと考えざるをえない。

まったくの想像に過ぎないが、ひとまず**難産の婦人を救ったことと人々から危害を加えられたのは出家受戒後の1年間のことで、阿羅漢果を成じたのはその後、すなわち帰信から1年後の釈尊74歳＝成道40年**としておきたい。

上述のようにアングリマーラの事績はこの帰信記事以外にはほとんど何も伝わっていないのであるが、釈尊74歳といえばすでに晩年であって、釈尊自身が間もなく亡くなるというときであるから、もしアングリマーラが阿羅漢を得た後も存命していたとしても、それが後

世まで伝わらなかったのかも知れない。あるいは後期の仏教聖典がいうように、アングリマーラは阿羅漢果を得てまもなく入滅したのかもしれない(1)。

（1）アングリマーラは舎衛城の人々から危害を加えられたとされるから、ひょっとするとこれによって命を落としたのかもしれない。